１．採点結果

⑴期末試験の採点結果：受験者 46 名、平均点 68 点（100 点満点）。最高点 99 点（３名）
各問の解答者と平均点（34 点満点）
１：31 名、26 点。２：14 名、20 点。３：26 名、20 点。４：8 名、21 点。５：20 名、28 点。６：13 名、21 点。７：7 名、20 点、８：19 名、21 点。

⑵レポートの採点結果：５が 15 名、４が 23 名、３が 7 名、２と１はゼロ名。

⑶成績
優 17 名、良 20 名、可 7 名、不可 2 名、未受験 8 名　受験者の平均 74 点
期末試験 60%、レポート 40%で総合　（レポートは上記採点結果を 8 倍する）

２．期末試験の採点基準と講評
⑴採点基準
・キーワードを正しく使っていれば一つにつき 5 点。上限 10 点。（なお解答例で示したキーワード以外のキーワードでも正しく使っていれば同様に評価）
・青い字で示したポイントを正しく書いていれば一つについて 3 点。上限 8 つ（24 点）
従って 1 問の最高点は 34 点だが、全部 34 点（34×3＝102）の場合には 100 点とする。
正しいことが書いてあれば加点し、間違ったことが書いてあっても減点はしない。

⑵講評
授業の目標は「さまざまな歴史観を対比し、関連づけ、類型化すること」であり、「正しい歴史観」を教えようとしているのではありません。試験問題のなかには意見を聞いているものもいくつかありますが、それは授業で述べた私の意見を反復することを求めているのではなく、独自の論拠を元に議論をすることを求めるものです。ただ試験の限られた時間内に参考文献もなく独自の論理を展開するのは難しかったのかもしれません。その分、レポートを書いてもらったのはよかったと思います。
答案のなかには分量・内容ともに短くて消極的なものが目立ちました。「正しいこと」だけを書こうとしているのかもしれませんが、短すぎてはどうにも加点することができません。時間と行数がたっぷりあるということは、問いに応えた知識と見解を存分に展開することを期待しているのです。間違ったことを書くことを恐れずにもっと書いて下さい。

東京大学教養学部**「政治経済学」試験問題**　持ち込み不可・試験時間 90 分

2014 年 2 月 3 日実施

教員：丸川知雄（社会科学研究所）

問　下記の設問のなかから 3 つ選んで解答しなさい。

但し、①どの設問に解答したのか冒頭に番号を記しなさい。②各設問ごとに「キーワード群」のなかから 2 つのキーワードを選び、解答の文章のなかで用いなさい。③用いたキーワードには下線を引きなさい。

1　マルクスの唯物史観とヘーゲルの歴史哲学との類似点と相違点は何かを論じなさい。

マルクスの唯物史観はヘーゲル哲学の強い影響のもとに形成されたものなので、類似している点が多い。両者とも人類の歴史は一つの方向へ向かって進んでいくという進歩史観を共有していた。また、原始的な共同体を除けば、アジアの専制的な王朝をもっとも低い発展段階だとみなし、西洋において歴史が進歩していったと考える点や、歴史には最終的な到達点があると考えるところも共通している。

両者の違いは、歴史を推進する原動力を何に求めるかという点にある。ヘーゲルの場合には歴史を動かすのは理性である。ヘーゲルのいう理性とは神のようなものだと言ってもいい。彼は理性が英雄などを操りながら自己実現するプロセスが歴史であると考えている。理性が実現した状態とはすべての人が自由な状態で、ヘーゲルが生きていたプロイセンの立憲君主制こそ歴史の完成型だとみなしていた。一方、マルクスは社会の経済的な土台が政治や文化などの上部構造を規定すると考えており、経済的土台の変化をもたらすのは生産力の進歩である。マルクスが生きていた 19 世紀の資本主義は生産力がかつてない進歩を遂げていた時代であるが、マルクスは資本主義という体制も生産力のさらなる進歩によってやがて覆され、いずれは社会主義の体制に移行するだろうと考えた。そこへ至れば人間はより大きな自由を獲得して歴史の歩みが完成するとマルクスは考えた。

注：世界史的個人、弁証法について正しく触れていればそれも加点する。

2　1920 年代末から約 10 年にわたって日本のマルクス経済学者たちが日本資本主義に関する大論争を繰り広げました。論争のなかで、東北の山間部における「名子」という、小作人が地主の田畑や山林で働くことで地代に代える制度のことが取り上げられました。余り一般的ではなかったこの制度が論争のなかで取り上げられた理由について説明しなさい。

日本資本主義論争の争点は、1920-30 年代の日本が果たしてマルクスの唯物史観でいう資

本主義の段階にあるのか、それともまだ封建制の要素を残しているのかという点にあり、前者の主張をした人々は労農派、後者の主張をした人々は講座派と呼ばれる。日本における近代的工業の発展を見る限り、資本主義が発展していることは誰しも否定しえなかったので、問題は農村の生産関係を資本主義的だと見なせるのか、それとも封建的要素を残しているのかという点にあった。論争が激しく闘わされたのは、日本の現状をどうみるかが左翼の方針に関わってくるからである。論争参加者はみな一様にマルクスの唯物史観を是認していたので、もし日本が完全な資本主義だと見なされれば、次の段階は社会主義だということになり、左翼は社会主義革命を目指すべきだということになる。しかし、もし日本が封建的要素を強く残しているのだとすれば、左翼はまず封建的要素を克服し、資本主義を徹底するための民主主義の実現に力を注ぐべきだということになる。

当時の日本の農村では土地を所有する地主と、土地を持たずに地主から土地を借りて農業を営む小作人という二つの階級で構成されるのが一般的だった。日本の農村が封建的要素を残しているかどうかを判断する鍵はこの地主と小作人の関係をどのようにみるかにある。もし地主と小作人の関係が何の強制性も伴わない単なる土地の貸借関係であれば、そこには封建的な要素があるとはいえない。一方、もし小作人が経済的な理由以外の理由によって小作人をやめられないような状況にあれば、そこには強制性があることになり、そうした地主・小作人関係は封建的だといえる。封建的要素を強調したい講座派の学者たちが着目したのが東北の山間部で見られた「名子」の制度だった。これは小作人が地代を支払う代わりに、地主が所有する田畑や山林で働く制度であり、講座派はこの制度に強制性が伴っているとして日本の農村に封建制が残存する証拠だとしたのである。

３　国連ラテンアメリカ経済委員会の事務総長を務めたプレビッシュは、一次産品の輸出を中心とする国は豊かになれないと主張しました。彼がそのように論じた理由は何でしょうか。またこの主張は正しいと思いますか。

プレビッシュは 1950 年代の世界経済は欧米先進国などの「中心」と、発展途上国などの「周辺」によって構成されており、中心は工業製品を輸出し、周辺は食料や原料などの一次産品を提供する役割を負わされている、と述べた。リカードの比較優位の原理に基づけば、周辺は一次産品の輸出に特化することが有利だとされる。だが、プレビッシュは一次産品の工業製品に対する交易条件は長期的にみれば低下していくので、周辺の地域は経済的に不利な状況に置かれ、豊かになることができないと主張した。なぜ一次産品の交易条件が低下するのか、という点に関してプレビッシュは二つの理由を挙げた。一つは先進工業国の工業は独占や寡占の構造になっていることが多く、労働組合も強いため、価格が上昇しやすいのに対して周辺の農業や鉱業はそのような状況にはないこと。二つめに、一次産品の需要の所得弾力性は工業製品に対して低いため、世界の所得が上がっていくとともに一次産品への需要が相対的に下がっていくことである。

プレビッシュが以上のような主張を行ってから約 20 年後に石油ショックが起き、石油価格が高騰したことに代表されるように、一次産品の交易条件が低下していくということが果たしていえるのかは疑問である。ハイテク製品の製造に必要なレアメタルなど特定の一次産品の価格が上昇することは今後も考えられる。どの一次産品も需要の所得弾力性が低いとは言い難い。工業製品も中国など新興国の工業が発展するとともに多くの製品では価格が低下しており、工業製品の交易条件が上昇していくといえるのか疑問である。ただ、プレビッシュの議論が当たっていたのは、各産業が寡占的か競争的であるかによって価格に影響が与えられると言っていた点である。石油ショックが起きたのも、中東などの石油輸出国が OPEC(石油輸出国機構)を結成して協調して価格引き上げを行ったからである。その後、OPEC 以外の石油輸出国が台頭したことにより、石油価格が逆に下がった時期もあった。

注：プレビッシュは中心（Center）と周辺(Periphery)、フランクは中枢(Metropolis)と衛星（Satellite）という用語を使いましたが、３に対する解答で「中枢」や「衛星」を使っている事例もありました。その場合はキーワードを正しく使っている場合の 5 点ではなく 3 点と評価しました。また、プレビッシュの見解を正しいとする答案でも、誤っているとする答案でも論拠を挙げながら議論していれば同様に評価しました。

４　「従属理論」とはどのような議論か説明しなさい。

従属理論とは 1966 年に A.G.フランクが書いた「低開発の発展」という論文のなかに典型的に示されたものである。この議論の特徴は低開発国が貧しい状況に置かれているのはまだ発展していないからではなく、先進国との関係の歴史的な所産だとする点にある。つまり、低開発国はいずれは発展して先進国になる発展途上国というより、先進国が発展したそのコインの裏側で低開発が生み出された、とする。フランクは世界を欧米先進国の「中枢」と発展途上国の「衛星」とにわけ、中枢の発展も実は衛星から貿易や植民地支配を通じて余剰を収奪したから実現したし、衛星が貧しいのは中枢との関係に原因があるという。フランクはラテンアメリカの国内にも大都市という中枢と、農村という衛星という構図があると指摘する。

従属理論の考えに従えば、低開発国が発展するには先進国との関係を変えなければならないということになる。不利な貿易関係を改善し、場合によっては断絶することもいとわない過激な主張であり、ラテンアメリカやアジア、アフリカの左翼によって支持された。学問的には低開発国経済の研究者だけでなく、ヨーロッパの近現代を研究していた人々にも従属理論は大きな衝撃を与えた。ヨーロッパにおける封建制から資本主義への発展は、ヨーロッパの内発的な発展として研究されていたのが、実はその裏には植民地など衛星の地域との関係があるとの主張は、ヨーロッパの資本主義をより世界的な視野からみる必要

を迫るものであった。

５　ロストウの経済成長段階論とはどのような議論か説明しなさい。

ロストウが経済成長段階論を唱えた本「経済成長の段階」の副題は「非共産党宣言」とされており、マルクスの唯物史観への対抗心をあらわにしている。ただ、その理論の構図は唯物史観とよく似ており、各国がその生産力の上昇とともにより高い段階へ移行していくとしている。ロストウの経済成長段階論は五段階からなっている。第一の段階は「伝統社会」で、農業が支配的な社会で、科学が生産技術に余り応用されていないため生産力は低い。階層的な社会構造になっていて階級間移動が少ない固定的な社会である。

第二の段階は「テイクオフへの準備」で、科学が農業や工業に応用されはじめる。中央集権的な国民国家が成立し、政府や企業に経済発展を推し進めようとする人々が現れる。彼らは社会の貯蓄を動員して交通や通信などのインフラへの投資を進めたり、企業を興したりする。

第三の段階は「テイクオフ」で、近代的な産業の発展が累積的に進む。国家も近代化を推進し、社会の貯蓄率が 10%以上へ高まる。新しい産業が勃興して都市が成長し、農業にも近代技術が応用されるようになる。新産業は関連する産業を牽引し、伝統的な社会が押しのけられていく。

第四の段階は「成熟への歩み」で、経済成長が続き、社会の貯蓄率は 10-20%の水準が続く。生産の増加が人口の増加をつねに上回るので生活水準が上昇する。テイクオフを牽引した鉄鋼や石炭といった産業に代わって、工作機械、化学、電気機器といった新産業が新たな牽引役となる。近代科学がすべての産業で応用されるようになったら社会は「成熟」に達する。成熟のあと、対外的膨張に向かう国、福祉社会作りへ向かう国がある一方で、次の「高度大衆消費」に向かう国もある。

第五の段階は「高度大衆消費」である。この段階は国民が衣食住以外にも消費するだけの余裕を持つぐらい所得が高まるため、耐久消費財やサービスが主導的な産業となる。産業発展が至上命題である時代は終わり、社会福祉や安全のために社会の多くの資源が費やされるようになる。ロストウによればアメリカは 1920 年代に高度大衆消費社会になったというが、それから 90 年を経た今日は新しい段階なのだろうか、それとも依然として高度大衆消費社会が続いているのか。所得格差が拡大し、新たな貧困が現れる状況をどう見るべきなのか。

６　1990 年前後に旧ソ連・東欧の社会主義政権が次々に崩壊したのをみて、フランシス・フクヤマは「歴史は終わった」と論じましたが、それはどういう意味なのか説明しなさい。また今日の視点からみて、「歴史は終わった」と言えるのか論じなさい。

フクヤマが「歴史は終わった」といったのはヘーゲルの歴史哲学を意識している。ヘーゲルはすべての国民が自由になった立憲君主制の実現によって世界精神が自己を実現し、歴史は終わる、と考えていた。ところが、ヘーゲルの死後、マルクス主義が台頭して、共産主義社会の実現こそ「歴史の終わり」だと主張し、数多くの国々がこの思想をもとにした国家を作って社会主義圏を形成したり、ファシズムが一部の国で広まって大量の殺戮が行われ、凄惨な戦争が繰り返されるなど、決して歴史は終わってはいなかった。歴史はいろいろな事件を繰り返しながらも究極的には進歩していくものだというヘーゲルの楽観的な歴史観は幻滅に終わり、むしろ戦争はいつまでもなくならないというリアリストの議論が勢いを得た。しかし、1970 年代から 80 年代にかけて南ヨーロッパ、アジア（韓国、台湾、フィリピン）、ラテンアメリカで次々と独裁政権が崩壊して民主化が進み、さらに 1990 年前後には旧ソ連・東欧で共産主義政権が次々と崩壊して民主主義、自由主義の方向に体制が転換した。社会主義は結局自由主義経済（資本主義）との経済力をめぐる競争に敗れたから放棄されたとフクヤマは指摘する。また、他人からの認知を得たいと願う人間の本源的な欲求に対して王制、貴族制、独裁制はいずれも不十分な満足しか与えないのに対して民主主義はもっとも多くの国民に認知という願望を満足させるゆえにいろいろな政治体制のなかで最終的に選択されるのは民主主義だという。こうしてさまざまな政治経済体制のなかで経済の自由主義と政治の民主主義がもっとも好ましいので、世界はそうした体制に収斂していき、そうした体制同士の戦争は稀なので、世界の歴史は終わる、とフクヤマは考えた。

フクヤマが「歴史の終わり」を著してから 20 年余りが経過したが、その後の世界はフクヤマの示した楽観的な世界観に対する幻滅をもたらすものである。旧ユーゴスラビアが崩壊した後の凄惨な戦争の継続は、民主主義の欠如が原因というよりも、むしろ社会主義という蓋がとれたことによって民族間対立の古傷が蒸し返されたからである。民主主義国どうしの日本と韓国でも、選挙を有利に運ぶためにかえって民族間対立を呼び覚まそうという政治家がいる。また、タイやエジプトのように民主主義へ移行したと思ったら反民主主義的な改革を求める運動が起きている国もある。歴史はなかなか終わりそうにない。ただ、戦争と圧政と貧困の歴史を終わらせようという我々の決意が重要である。

注：フクヤマの見解がいまでも成り立つという意見でも、成り立たないという意見でも論拠を提示して論じていれば同様に評価します。

7　フランク(A.G.Frank)が 1998 年の著作のタイトル「リオリエント(ReORIENT)」に込めた意味を説明しなさい。

フランクが従属理論を提起したのを受けて、ウォーラーステインは 1450 年頃にヨーロッパを中心とする世界経済という世界システムが成立し、その後貿易や植民地化を通じて世

界をそのシステムに巻き込んでいったと論じた。それに対してフランクは世界経済の中心がヨーロッパになったのはせいぜい 19 世紀以降のことであって、それ以前はむしろ中国が世界の中心であったと論じた。ヨーロッパはコロンブスによるアメリカ大陸の「発見」以降、南北アメリカを植民地化してそこで銀を発見するが、そうして得られた銀はヨーロッパの繊維製品と引き替えにヨーロッパにもたらされ、それをヨーロッパはアジアの織物や香辛料を購入するのに支払い、アジアにもたらされた銀は域内でさまざまな貿易を仲介しながら、最終的には巨大な貿易黒字国であった中国に飲み込まれていった。ヨーロッパは中国を中心とする朝貢貿易のネットワークのなかで貿易を仲介したり、新大陸の銀を持ってくることによって参加を許されたに過ぎない。1990 年代以降に顕著になったアジアの経済的台頭は、実は 18 世紀まで世界経済の中心だったアジア（中国）の復興だということができる。これがフランクが「リオリエント」という言葉に込めた一つ目の意味である。また、マルクスやウォーラーステイン、ポランニーなど、ヨーロッパに成立した資本主義が世界を席巻していったという世界観を改め、ヨーロッパ中心主義を打破し、アジアが中心だった時代があったことを認識しようという、歴史観の方向替え（リオリエント）という意味も込めている。

８　大陸の形状が人類の歴史に影響を与えたとみられる事例を説明しなさい。

梅棹忠夫は「文明の生態史観」のなかで、ユーラシア大陸をその東西の両端にある西ヨーロッパと日本からなる第一地域と、中心部の第二地域とに分け、第二地域の中央部には広大な乾燥地帯が広がっていることを指摘した。こうした地形であるため、両端の第一地域はそれぞれの内発的な論理で封建制から資本主義に発展できたのに対して、第二地域に属する中国やインド、ロシアなどの国々は乾燥地帯に住む遊牧民の侵略によって内発的な発展が途中で暴力的に止められてしまったため資本主義が発展しなかった。

また、ジャレド・ダイヤモンドが「銃・病原菌・鉄」のなかで指摘したのは、ユーラシア大陸は東西に長いのに対して、アメリカ大陸とアフリカ大陸は南北に長いことである。おおむね同緯度の地域では気候が似ているため、ある地方で野生の植物が栽培されるようになったり、野生の動物が家畜化されると、同緯度の地域に伝わりやすい。実際、ユーラシア大陸ではある地方で小麦や米などが栽培されるようになると、それが比較的短期間のうちに東西に伝播していったことが植物の遺伝子の分析によってわかるという。一方、南北方向では気候が大きく異なるので、例えば北方の温帯で栽培されている植物や、飼育されている動物が南方の熱帯に伝わるためには相当の品種改良が必要となる。熱帯から温帯への伝播についても同じである。そのためヨーロッパ人が渡来する以前の南北アメリカでは相当な文明の発達があったにも関わらず、アンデス地方で家畜化されていたラマがメキシコに伝わっていなかったり、メキシコで始まったトウモロコシの栽培が北米に伝わるまで何千年も要するなど、農業や畜産の技術伝播に困難があった。アフリカ大陸でもメソポ

タミアで始まった農業がサハラ以南に伝わるためには間の熱帯雨林を通過しなければならないのできわめて長い時間がかかった。家畜との接触は人間を病気に感染するリスクを高めるが、長年の接触のなかで人間は免疫力を高める。ユーラシア大陸では東西の交流が盛んで、多様な動物とも接触したため、人々の免疫力が高かった。ヨーロッパ人の新大陸「発見」以降、南北アメリカの原住民との接触によってもっぱら後者の人口が病気に感染して激減してしまったのは、間接的には大陸の形状の影響を受けたといえよう。

キーワード群
ユーラシア　高度大衆消費社会　朝貢貿易　ヘーゲル　生産力　労農派　周辺　中枢　テイクオフ　低開発　理性　需要の所得弾力性　民主主義　遊牧民　南北アメリカ　封建制　銀　衛星